

DISCUSSION PAPER SERIES

2014-06

音楽教育におけるキャリア形成と教育理念
—専門分野におけるキャリア教育のあり方の模索—

高橋 一恵 ・ 若林 隆久

March 21, 2015

Discussion Papers can be downloaded:

<http://www1.tcue.ac.jp/home1/c-gakkai/dp/dp14-06>

音楽教育におけるキャリア形成と教育理念¹

—専門分野におけるキャリア教育のあり方の模索—

高橋 一恵²

若林 隆久³

1. はじめに

キャリアあるいはキャリア教育への注目が集まるようになって久しい。その原因としては様々な経済的・社会的な変化が挙げられるが、特に学校におけるキャリア教育の登場の背景には若年雇用問題に端を発する政策的な取り組みが存在している（児美川, 2013）。⁴学校においてキャリア教育が盛んに行われるようになった一方で、現在行われているキャリア教育に対しては特定の職業との結びつきがなく内容が曖昧で具体性を欠くという批判がなされており、職業的意義の高い教育の必要性が主張されている（濱口, 2013; 本田, 2009）。⁵現在のキャリア教育の背景にある若年雇用問題は、部分的には知識やスキルを持たない若者の就業が難しいということが日本の社会の変化によって顕在化してきたものであり⁶、個人が仕事の世界に参入する際の初歩的な準備を与えるために専門分野⁷における具体的な知識やスキルを伝えることが必要であるという主張がなされている（本田, 2009）。

このように特定の専門分野に根差した職業的意義の高い教育が重要とされる一方で、

¹ 本稿の一部は、第1回「組織におけるキャリアとワークスタイル」研究会（2014年12月10日）、および、高崎経済大学地域政策学部の「グループ研究Ⅰ：「働くこと」を考える」の講義内で行われたインタビュー（2015年1月26日）の内容に基づいている。

² 東京藝術大学大学院 音楽研究科 博士後期課程

³ 高崎経済大学 地域政策学部 講師

⁴ 児美川（2013）も指摘するように、大学もその例外ではない。卒業生の就職実績が大学選びを左右するということもあり（日経キャリアデザイン 編, 2014; 読売新聞社, 2014）、また、実際に就職活動に直面することになる大学生自身からのニーズもあってか、大学においてもキャリア教育が盛んにおこなわれるようになった。大学におけるキャリア教育の教科書としては、例えば大宮（2014）が挙げられる。

⁵ この他にも、現在のキャリア教育には、やりたいことを重視しすぎていること、職場体験やキャリアプラン作成の際の基礎的な学習や意味づけが不十分なこと、正規雇用を前提とし過ぎていること、勤労観・職業観や意思決定能力・将来設計能力を持たなければならないという規範や圧力を高めるだけの結果に終わっていること、などという批判がなされている（本田, 2009; 児美川, 2013）。現在のキャリア教育に対する批判については、特に本田（2009）の第4章が詳しい。

⁶ 濱口（2013）は、欧米のジョブ型社会（日本以外のアジア諸国も基本的にはこちらに属する）と日本のメンバーシップ型社会を対比させ、欧米のジョブ型社会では当たり前であった若年雇用問題が日本では長らく存在しなかったことを説明している。

⁷ ここで分野とは、複数の相互に関連した職業群を含むような、ある程度の幅をもつと同時に一定の専門性の輪郭を備えているような知識やテーマのまとまりのことである（本田, 2014, p. 161）。

明確な専門分野において具体的な知識やスキルの伝授がなされれば必ずその後のキャリアを上手く歩めるわけではないようである。例えば、芸術の分野は職業的意義の高い職業実践的な専門教育が行われている分野として指摘されている（本田，2009，pp. 119-120；本田，2014，p.130. p. 146）。しかし、大内（2015）では、この芸術の分野に含まれると思われる音楽大学の大学生（音大生）が、一般の大学生と比較して明確な専門分野における知識やスキルの習得に高い水準の努力をしているにもかかわらず、その後のキャリアを歩むことに苦労するという現実が述べられている。もちろん、多くの音大生が当初に志すであろう演奏家や作曲家のような芸術家として生きていくことが非常に狭い道であることも一因ではあるだろうが、それ以外で卒業後の進路の候補となるであろう音楽に関連した職業においても音楽大学で専門教育を受けた人は意外と少ないという指摘（久保田，2008，p. 53）は看過できない。特定の専門分野に根差した職業的意義の高い教育であっても、その内容が不足していたり範囲や方向性に問題があったりするのかもしれない。

そこで、本稿では専門分野が明確である音楽大学（音大）の卒業生の事例を取り上げ、専門分野を学んだことがその後のキャリアにどのような影響を与えているかを明らかにする。事例を通じて、専門分野においてどのようなキャリア教育あるいは職業教育が行われるべきであるかを模索することが本稿の目的である。

2. 事例

2.1. 経歴

高橋一恵氏は、岩手県内の普通科の高校を卒業した後に、国立音楽大学音楽学部に入學する。大学卒業後、ピアノ講師として都内の音楽教室に勤務する。その後、東京藝術大学大学院音楽研究科音楽文化学専攻ソルフェージュ研究分野修士課程に入學する。修士課程修了後の一年間は音楽事務所でアルバイトをしながら個人でピアノ教室を主宰しピアノ講師をしていた。その後、2013年4月に東京藝術大学大学院音楽研究科音楽専攻音楽文化学研究領域（音楽教育）博士後期課程に入學し、現在も在学中である。

2.2. 現在の仕事

現在は、①大学院博士後期課程の学生として研究、②自宅で音楽教室を主宰、③音楽事務所でアルバイト（週1回）、という三足のわらじの生活を送っている。⁸

2.2.1. 博士後期課程の学生としての研究

東京藝術大学大学院の音楽研究科の博士後期課程の学生として、音楽教育研究室に所

⁸ 2014年12月10日時点。

属し、20 世紀にスイス・フランスを中心に活躍した音楽教育家エドガー・ウィレムスについて研究を行っている（高橋, 2014a, 2014b）。具体的な研究方法としては、文献と資料を収集し読み進めて分析している。エドガー・ウィレムスの教育法はヨーロッパと南アメリカでは普及しているが日本ではほとんど知られていないため、フランスから文献を購入しフランス語の文献を読んでいる。2014 年 8 月にはイタリアのローマで開催されたウィレムス国際会議⁹に出席した。

2.2.2. 音楽教室の主宰

自宅で「ヴェルジェ音楽教室」¹⁰という名前の音楽教室を主宰している。「verger」はフランス語で「果樹園」という意味であり、「果物が太陽の光や水を受けてゆっくりじっくり実るように、時間と愛情をかけて才能の芽を育てていきたい」という想いで付けた名前である。他の講師の方とも連携しながら、ピアノ、ソルフェージュ¹¹、楽典¹²、和声¹³、アルトサックスなどを教えている。子どもから大人まで、初心者から音楽家を志す音楽高校生・音大受験生・音大生まで、幅広い生徒を教えている。

ヴェルジェ音楽教室の特徴として、1 レッスン制であることが挙げられる。普通のピアノ教室では毎週決められた曜日・時間にレッスンを行う月謝制が一般的であるが、ヴェルジェ音楽教室ではその都度レッスンの日程を決めていく。1 レッスン制のメリットとしては、講師である自分もレッスンを受ける生徒も予定を縛られず自由に予定を決められることや、一回のレッスンに対応してレッスン料が発生するために生徒がきちんと練習してくる、つまり、保護者がレッスンを無為なものとしないうちに自宅で生徒に練習させることが挙げられる。一方で、デメリットとしては、生徒のピアノ教室に対する所属意識が目覚めにくいことや、どの程度の収入が見込めるかが分かりづらいことが挙げられる。経営の視点で考えると収入は不安定になりやすい。

2.2.3. 音楽事務所でのアルバイト

修士課程修了後に始めた音楽事務所でのアルバイトを現在も継続している。博士後期課程入学前は週に 3~4 日働いていたが、現在は週 1 日のみである。会社自体の事業内容は、レコードの制作・製造・販売、コンサートの制作およびアーティスト・マネジメ

⁹ エドガー・ウィレムスに関する国際的な組織であるウィレムス国際連盟（Fédération Internationale Willems、<http://www.fi-willems.org/>）が主催する国際会議である。2014 年 8 月 18 日から 24 日にかけて開催された第 36 回ウィレムス国際会議には、全世界から 200 人ほどの音楽教育者が集った。

¹⁰ <http://www.verger-music.com/>

¹¹ 音楽の基礎教育全般—音程、リズム、音部記号の読譜、視唱練習、和音感の養成、暗譜、聴音などをさす（浅香淳 編, 1979）。

¹² 音楽に用いる音を楽譜に記すための約束あるいは規則を説明する理論（浅香淳 編, 1979）。

¹³ 各種の和音の性質の理解とそれらの連結を対象とする、音楽理論の一分科をいう（和声学、浅香淳 編, 1979）。

ント、海外アーティストの招聘である。

アルバイトとしての主な仕事内容はクラシックのコンサートの企画・運営に伴う業務であり、具体的にはコンサートのマネジメント業務、チケット業務、公演当日の業務などが挙げられる。海外からアーティストを招聘することも多く、その場合はアーティストのビザ・航空券・ホテルを手配したり、来日後の送迎やインタビューに立ち会ったりする。チケット業務では、チケットの発売日の設定や、チケットぴあや e+といったプレイガイドへの委託、チケット販売やお客様の問い合わせの電話受付、などを行う。プレイガイドへの委託では、自分たちで各プレイガイドへ委託する席を決め、売れ行きの週報に基づいて各プレイガイドへのチケットの配分を変えることもある。公演当日の業務としては、本番時のステージ・マネージャー、当日券の販売、招待客への対応がある。これ以外にコンサートで使用する楽曲を JASRAC（日本音楽著作権協会）に申請することも仕事である。現在は Web 上で曲目利用申請ができるようになっている。

2.3. キャリアの変遷

どのようにして現在の状態に至ったかを大学時代から振り返る。

2.3.1. 大学時代の思い出

高校時代は、両親の意向もあり音楽高校ではなく普通科の高校に通い、活動の盛んな吹奏楽部に所属していた。その後、国立音楽大学に入学してからの生活は、ピアノを練習していると褒められるという、これまでの環境では考えられない夢のような生活であった。普通科しかない母校では、大学入試センター試験受験対策としての課題や课外授業、模擬試験なども多かった。学校の勉強が第一にあり、音大受験を志望していても「ピアノばかり弾いていないで」という風潮があった。

大学入学直後、師事していたピアノの先生から、「最初の二年間、本気で頑張ってみて、そうしたら後の二年、必ず違ったものになるから」と言われた。ピアノが上手になりたい一心のみで迷うことなく音大という進路を選んでいたため、先生の言葉を折に触れて反芻しながら、特に 2 年次まではピアノの練習ばかりに明け暮れる生活を送った。卒業時には、一つの目標としてきたピアノの成績上位者コンサートにも出演することができた。

3 年次からはソルフェージュのゼミに入り、それまでのピアノの練習に加え、ゼミの活動にも熱心に参加するようになった。卒業作品として、メンバー全員で音楽劇『星の王子さま』を創り上げたことが特に思い出に残っている。アントワーヌ・ド・サンテグジュペリ（Antoine de Saint-Exupéry）による『星の王子さま』（原題：Le Petit Prince）は、2005 年に原著の日本における著作権が切れたばかりであったため、大学 4 年次の 2006

年は多くの翻訳本が出版され始めた時期であった。¹⁴そこで、原著および様々な翻訳を参照しながら数名で台本を作成し、作品全体を彩るテーマ曲を作曲した。場面ごとに作曲担当者も決め、ピアノソロや声楽、室内楽、オーケストラまで様々な編成の作品が生み出された。会場の手配、衣裳や大道具・小道具、プログラムなどの作成も行った。公演当日、自分たちの作品をそれぞれの楽器の専攻生に演奏してもらい、その演奏をバックに、ナレーション、芝居、場面転換まで、すべてをゼミのメンバーたちで行った。わがままなバラの役と、その場面の音楽の作曲、台本作成を主に担当した。

2.3.2. 大学卒業後の進路

大学生活の中でのピアノが上手になりたいという目的は明確であったが、大学卒業後の進路については具体的な目標ややりたいことを持っていなかったため、随分悩むこととなった。

多くの音大生のように演奏家になりたいということにはなかった。ピアノの演奏は大好きであるが、それはあくまでも自分の精神的な満足のためであり、演奏家を志す多くの者が望むような「素晴らしい作品を自分の演奏を通して他人と共有したい」や「自分の演奏で人の心を動かしたい」というような思いを持ったことはなく、演奏家として身を立てていくことは現実的に考えられなかった。何より、世の中に素晴らしい演奏家が沢山いる中でやっていける実力があるとも思えなかった。そのため、演奏家を目指す音大生にとっては一般的である、卒業後に留学するという進路は考えなかった。

学校の教員やピアノの先生などの教育職に就くということも、当時はしっくり来なかった。中学・高校の音楽の教員免許は大学在学中に取得しており、4年次に行った母校の高校での教育実習は非常に楽しく、実り多きものであった。しかし、音楽の授業以外で重要な業務となる学級担任、進路指導、生徒指導などについて、当時は十分な関心を持つことができなかつたため、教員採用試験を受けるには至らなかった。

さらに、一般の企業に就職するということも考えられなかった。音楽の勉強に熱心に取り組み充実した大学生活であったが、このように卒業後の進路については明確な目標を見つけられずに非常に思い悩んだおぼえがある。しかし、今振り返ってみると、自らの凝り固まった考えによって八方塞がりになってしまっていたように思う。

大学の多くの友人たちは、すでに卒業後の方向性を決めていくか、あるいは決めてい

¹⁴ 例えば、筆者らの手元にあるものとして、集英社の池澤夏樹訳（2005年）や新潮社の河野万里子訳（2006年）などが挙げられる。『星の王子さま』の（日本における）著作権およびその保護期間などに関しては、著者の死亡日がいつであるかと作品発表から第二次世界大戦終了までの期間の戦時加算の扱い（サンテグジュペリは戦争期間中に消息を絶ったおよそ1年後に死亡が認定されている）、その後の国内外での著作権関連の法制度の変遷、当時の技術的な問題もあり挿絵に複数の種類が存在すること、挿絵の商標権、など様々な問題が絡み合うことで複雑になっている。これらの点に関しては、「Rassemblement du Petit Prince（星の王子さま総覧）」

（<http://lepetitprince.net/>）という Web サイトが詳しい（2015年3月21日検索）。

なくてもあまり深刻には考えていない様子であったため、このような悩みを誰かと共有するということはほとんどなかった。

そんな中、個人的にレッスンに通っていた大学のゼミの先生の自宅で、ピアノ教室を主宰している卒業生の方と出会い、ピアノ講師の誘いを受けた。進路に悩んでいたこともあり、引き受けてみることにした。レッスンは生徒一人からのスタートであったが、初めてレッスンをした時は非常に緊張した。音大ではピアノの演奏に関することは存分に学べたが、ピアノの教え方については習ったおぼえがなく、どのように教えるかは自分で考えなければいけなかった。教え始めるようになって、自分ができるようになることと、子どもをできるようにしてあげることは全く違うことであると気付いた。

指導法について悩んでいたある時、「子どもたちが何かの遊びをする時、ルールがわからない子にも上手に教えてみんなで楽しんでいる」ということに気が付いた。子どもたちは指導法云々ということを考えているわけではなく、純粹に一緒に遊びたい一心でルールを友達に上手に教えているのである。それと同じように、自分がこれまで楽しんで続してきた音楽やピアノの楽しさを子どもに伝えれば良いのだということに気が付いた。それまでは先生と生徒という立場にとらわれてしまっていたが、このように考えられるようになったことで、気負わずにレッスンができるようになった。

大学を卒業する3月に、大学で師事していたピアノの先生からも先生の自宅でのピアノ講師の誘いがあり、そこでは既に5人ほど生徒がいるところからスタートすることになった。こうして大学卒業時には二つの教室でピアノ講師として働く状態になっていた。

2.3.3. ピアノ講師という職業

このように、特に就職活動らしいことをすることもないまま、大学を卒業しピアノ講師として働くことになった。さまざまな知人とのつながりによって、教えに行く教室も都内4か所にまで増えていき、徐々に生徒の数も増えていった。気が付けば、一週間におおよそ60名もの生徒を抱えるピアノ講師になっていた。生活を維持するためには沢山の生徒を持つ必要があったが、次第にそれは教育として理想的な状態ではないことを感じ、その挟間で気持ちが揺れ動くようになっていった。レッスンは受験生を除いて基本的に一人30分であり、次から次へとこなすことに必死であった。レッスンに力が入り喉を酷使してしまうため、仕事の後は毎日ぐったりとしていた。

忙しい日々ではあったが、特に大学で師事していた先生の自宅でのレッスンでは、時々先生のサポートがあり、その中で指導法の奥深さ、多様さ、面白さに目覚めることになった。先生の指導を間近で見ることで、同じことを伝えるのにもいくつものアプローチがあることを知った。その引き出しをできるだけ多く持つことの重要性を痛感するようになり、ピアノを中心とする音楽指導者の団体である全日本ピアノ指導者協会（ピ

ティナ)¹⁵のセミナーを受講したり指導者検定の受検を開始したりした。

少しずつ経験を重ねていく中で、ピアノ講師という職業はピアノ演奏に関する技術的なことを教えるだけでなく、長い時間をかけて人の心に何かを育み残していくことができるかけがえのない仕事であると思うようになった。ピアノのレッスンは、学校とは違い決められた年限はなく、生徒が通い続けてくる限りは小学生から中学生・高校生やそれ以降へと続いていく。自身の経験でも、師事してきたピアノの先生からは、ピアノ以外の日常的な面や考え方で人間形成に影響を受けたと感じている。

このような一つ一つの経験や気付きの中で、一生教育者として音楽に携わっていきたいと望むようになった。そのためには、単にピアノの演奏や教え方が上手いだけではなく、自分の師事してきた先生のように人間としてもより良くならなくてはならないと感じている。

2.3.4. 将来の夢と大学院入学

ピアノ講師の仕事にやりがいを感じていた一方で、自分の志が高くなるにつれて、悩みも出てくるようになった。ピアノ講師をしていると、みんながピアノを弾きたくてレッスンに来ているわけではないという現実直面することになる。ピアノや音楽が好きなのではなく親に言われてレッスンに来ている子をいかに惹きつけるかが重要であり、そのことに尽力していたが、同時に「本当に教えたい相手は誰だろう？」と考え始めるようになっていった。

その結果、「学ぶ意欲のある生徒を対象に役に立つものを与えられる指導者になりたい」という思いや「自分の思う理想的な教育を展開できる立場になりたい」という思いを持つようになった。そのためには、そういう生徒の集まる場所で教育できる立場になることが必要であり、何より、自分自身ももっと勉強しなくてはならない。

そんな折、大学卒業後も和声や作曲を学ぶために個人的に師事してきたゼミの先生から、大学院の作曲科を受けてみないかと誘いを受けた。この時にはすでに教育者として音楽に携わることを望むようになっていたため、作曲家として生きる未来は見えなかったが、自分の学ぶ場としての大学院には惹かれるものがあった。そこで、ソルフェージュや和声といったこれまで学んできたものを活かすことができ、将来的に教育にも携わることができる場所としてソルフェージュ科の受験を検討し始めるようになった。

大学院受験を検討し始めるようになって、大学時代に一般教養科目の先生が嬉々として自分の専門分野について話していたことを不意に思い出した。内容には興味を持てなかったが、「大学の先生は自分の好きなことを話すことが仕事である」ということが印象に残っていた。

こうしたきっかけもあって、大学の先生になって生徒数にとらわれずに志の高い生徒に教えられるようになりたいと思い、そのためにも必要な大学院を目指すことにした。

¹⁵ <http://www.piano.or.jp/>

大学院を目指し始めてからは、ピアノ講師としての仕事をしながら、受験のためにピアノ、ソルフェージュ、和声のそれぞれのレッスンに通い、フランス語学校にも通う日々となった。この時期は、人生で最も忙しくて苦しかった日々である。努力の甲斐あって、東京藝術大学大学院音楽研究科に合格することができた。思い悩んだ末、学業に専念するため、ピアノ教室の仕事はどうしてもレッスンを続けてほしいという生徒を除いてほぼ全員を手放すことにした。

修士課程修了後の一年間は、音楽事務所でアルバイトをしながら、自分の理想の教育法を実践できる場として音楽教室を立ち上げピアノ講師をしていた。その後、修士課程での研究（高橋, 2012）の中で出会い、魅力を感じた音楽教育家エドガー・ウィレムスの教育法に関する研究をしていくために、専門分野をソルフェージュから音楽教育へと変え、東京藝術大学大学院音楽研究科の博士後期課程に入学して現在に至っている。

2.4. キャリアの振り返り

これまでを振り返ってみると、普通科の高校生、国立音楽大学の学生、ピアノの先生、東京藝術大学の修士課程の大学院生、東京藝術大学の博士後期課程の大学院生というようにキャリアを進めてきた。進路に悩んだ大学卒業時を除いては、常に何かしらの目標に向かって歩んできたように思う。一度目的が明確に定まると、そこに向けて一心に努力することができる人間であるということがわかってきた。

周りからは「いつも好き勝手に生きている」、「悩みがなさそう」と言われることが多いがそれでも悩むことはあり、学校の先生になっていたらどんな生活であったか、一般の企業に就職をしていたらどんな生活であったかを時おり考えることもある。高校や大学の友人を見ても、人生は様々であり長期戦であると感じられる。隣の芝生が青く見えることもあるが、どのような道を歩んでいたとしても、きっとどこかのタイミングで音楽教育の奥深さに目覚めることになったのではないかと思えることが心の支えになっている。

人生を歩んでいく際には、自分がどの場所にいると心地良いのかを知ることが大切であると思う。また、現在いる場所が自分にとって心地良い場所ではないと思った時に、他の場所を見つけて動けるかどうかも重要である。60人の生徒を受け持っていた4つのピアノ教室を辞めて大学院に行くという進路選択は大きな決断であった。しかし、「やらない後悔よりやる後悔」と考えており、もし上手くいかなかったとしても、上手くいかないことが分かったことは収穫であるし、その過程において自分で努力して得たものはなくなる。人生を振り返ってみても、やってみて後悔したということはあまりない。人生は一度きりであり、その中でも自分のためだけに使える時間はとても限られたものであることを銘記しなくてはならない。

3. おわりに：事例から得られる示唆

本稿で取り上げた事例にはいくつかの特徴的な点があり、そこから専門分野におけるキャリア教育のあり方について示唆を得ることができる。下記の四点を指摘して稿を閉じたい。

第一に、卒業後の進路やキャリアをしっかりと考えさせることである。事例の中でも指摘されているように、専門性の高い音大生ではあるが、卒業後の進路をはっきりとさせないまま卒業してしまうことが多いようである。¹⁶専門分野に根差した職業的意義の高い教育は将来の進路を考える上でも有効であるが（本田, 2007, 2014）、音楽大学における教育ではこの点に関して不十分なのかもしれない。¹⁷キャリアやキャリア教育への関心の高まりもあってか、主に音大生を対象とした音楽大学・音楽業界に関連するキャリアについて取り扱った書籍が最近になって相次いで出版されていることは示唆的である（青島, 2011; 久保田, 2008; 茂木, 2008; 新村, 2011; 大内, 2015、など）。¹⁸

第二に、多様な進路の選択肢を提示することである。本稿の事例では、偶然の誘いを受けて大学在学中には想定していなかったピアノ講師という職業に就くことになっている。このように本来希望していた進路と異なる進路へと卒業後に進むことは、音楽大学においては一般的であると考えられる。というのも、本稿の冒頭でも指摘したように多くの音大生が当初に志す演奏家や作曲家という進路は非常に狭い道であり、必然的に将来の進路やキャリアを転換することが強いられるからである。このことは、第一点で指摘した卒業後の進路がはっきりしないまま卒業してしまう音大生が多い理由の一つであろう。演奏家や作曲家という進路が非常に狭い道であることを前提とすれば、音楽大学においては学生に対して他の多様な進路の存在を示すことが重要であろう。¹⁹

第三に、演奏家や作曲家といった進路以外への転換をする際に必要となる知識やスキルを教えることである。例えば、音大生にとって学校の教員や音楽教室の講師を含めて何らかの形で音楽を教えるということは一般的な進路である一方で、事例の中にもあるように音楽大学では演奏の方法を教えられてもその指導法についての教育はそれほど充実していないようである。仮に多様な進路を提示したとしても、その職業へ就くために必要となる知識やスキルの習得が不十分であれば片手落ちである。多様な進路の存在を示しながら、そのための知識やスキルも教えていくことが必要であろう。言い方を換えれば、久保田（2008, p. 53）も指摘するように、音楽大学では想定する職業分野を狭

¹⁶ このような学生の存在については大内（2015, pp. 80-82）でも言及されている。ただし、このような現象は必ずしも音大生に特有の現象ではなく、その多寡はともかく一般の大学生にも見られる現象である。

¹⁷ 音楽大学における、就職支援やキャリア教育の立ち遅れについては大内（2015, p. 45）も指摘している。

¹⁸ これらの書籍はすべて何らかの形で音楽大学に関わっている著者によるものであるが、それぞれの立場・経歴によって書かれている内容も大きく異なっており興味深い。

¹⁹ 久保田（2008）や新村（2011）や大内（2015）は、この点を意図した書籍であると言える。

く限定しすぎているのかもしれない。

第四に、自分の希望とは異なる進路への転換ということも含めて、偶然をつかまえて自分のキャリアを切り開いていくことや社会的なつながりの重要性を意識させることである。本稿の事例では、ピアノ講師になったことは偶然の誘いによるものであったが、仕事を続ける中でそのやりがいや意義を見いだして最終的には一生教育者として音楽に携わっていきたいと思うようになり、大学院への進学や自分の音楽教室の立ち上げに至っている。その過程で、ピアノ講師の誘いを受ける時だけではなく、指導法に対して関心を持つようになる際にも、大学院の進学を検討するようになる際にも、恩師とのつながりが重要な役割を果たしている。フリーランスとしての活動のような専門性に基づく固有の労働市場が形成されている芸術分野（本田, 2014, p. 130）では、予期できないキャリアの機会をつかまえること²⁰や社会的なつながりの存在は特に重要であると考えられる。²¹専門分野に関する知識やスキルだけではなく、どのようにキャリアを作り上げていくかというスキルや方法に関する教育も行われる必要があるだろう。

謝辞

「組織におけるキャリアとワークスタイル」研究会に参加された皆様からは貴重なコメントを頂戴しました。また、本研究は、高崎経済大学地域政策学会「学生向け学習・研究支援プログラム助成」および日本学術振興会 科学研究費助成事業・研究活動スタート支援 課題番号 26885061「職場におけるネットワークがパフォーマンスに与える影響およびそのメカニズムの解明」（2014年度～2015年度、研究代表者：若林隆久）の助成を受けております。ここに記して感謝申し上げます。

参考文献

- 青島広志 (2011)『音楽家をめざす人へ』筑摩書房。
浅香淳 編 (1979)『音楽中辞典』音楽之友社。
濱口桂一郎 (2013)『若者と労働 「入社」の仕組みから解きほぐす』中央公論新社。
本田由紀 (2009)『教育の職業的意義：若者、学校、社会をつなぐ』筑摩書房。
本田由紀 (2014)『もじれる社会：戦後日本型循環モデルを超えて』筑摩書房。
児美川孝一郎(2013)『キャリア教育のウソ』筑摩書房。
久保田慶一 (2008)『音楽とキャリア』スタイルノート。
Mitchell, Kathleen E., Al S. Levine, and John D. Krumboltz (1999). Planned happenstance: Constructing unexpected career opportunities, *Journal of Counseling & Development*, 77(2),

²⁰ 計画的偶発性理論 (planned happenstance theory) では、偶然をキャリアの機会として認識し、作り上げ、活用するためのスキルとして好奇心、持続性、柔軟性、楽観、リスクテイキングの5つが挙げられている (Mitchell, Levine, & Krumboltz, 1999)。

²¹ 茂木 (2008) では、プロの音楽家を目指す上でのコネの重要性が指摘されている。

115-124.

茂木大輔 (2008)『音大進学・就職塾』音楽之友社.

新村昌子 (2011)『音大生のための就職徹底ガイド：こんなにある、音楽の知識と経験が生かせる仕事』ヤマハミュージックメディア.

日経キャリアマガジン 編 (2014)『受験から就職まで 親と子のかしこい大学選び 2015年版』日経 HR.

大宮登 (2014)『理論と実践で自己決定力を伸ばす キャリアデザイン講座 第2版』日経 BP 社.

大内孝夫 (2015)『音大生のための就職徹底ガイド：こんなにある、音楽の知識と経験が生かせる仕事』ヤマハミュージックメディア.

高橋一恵 (2012)「内的聴感育成のためのアプローチ：ラヴェル《水の戯れ》を題材に」東京藝術大学大学院音楽研究科修士論文.

高橋一恵 (2014a)「エドガー・ウィレムスの音楽教育思想：その生涯と聴覚育成に関する論考の検討を通して」『音楽文化学論集』第4号, 59-68.

高橋一恵 (2014b)「エドガー・ウィレムスの音楽教育思想と聴覚育成への一考察」『日本ソルフェージュ研究協議会 2013 年度活動記録』pp. 30-34, 日本ソルフェージュ研究協議会.

読売新聞社 (2014)『就職に強い大学 2015』読売新聞社.

高崎経済大学地域政策学会
370-0801 群馬県高崎市上並榎町1300
027-344-6244
c-gakkai@tcue.ac.jp
<http://www1.tcue.ac.jp/home1/c-gakkai/dp/dp14-06>